

「アジアと共に歩む福岡」

平成 15 年 4 月 21 日(月)

講演者： 野田順康、国連ハビタット福岡事務所長

講演場所： 電気クラブ講演会 （於 電気ビル本館 12 階スカイルーム）

国連ハビタットってまだ良くご存知ないか方も多いと思いますが、まちづくりの国連機関として住宅とそれに関連する施設、上下水道、街路等を発展途上国で整備しています。特にハビタットは住民に最も近い国連機関と言われています。事業の実施に当たっては住民の意見を最大限に尊重して、住民自らも事業に参加することを促進しています。

1997 年にアジア太平洋事務所を福岡に誘致していただき、早くも 6 年目となっています。最初の 5 年間はアジア太平洋の事業に集中して地元との交流が不足気味でしたが、昨年からは出来るだけ福岡の国際化に貢献するようにしています。テレビ、新聞等での報道も増えて徐々に福岡に根付いてきたかなと思っています。

現在、アクロス福岡の 8 階に事務所を置いています。職員が 16 名、インターン等を含めると 20 名程度の職員が常時勤務していますが、国際専門職員は頻繁に海外出張していて留守にしがちです。また、アジア太平洋地域で約 70 の居住関連事業を実施していますので、この福岡事務所の下に 16 の事業事務所をアジア太平洋地域に展開しており、約 1,000 人の職員が勤務しています。

予算規模は今だいたい 60 億円ぐらいでやっておりますので、日本でいうとそれほど大きくありません。しかし、所得がだいたい 100 分の 1 ぐらいのところですから、日本の事業規模でいうと 6000 億位の事業規模を考えていただくとその大きさが分かっていただけるのではないかと思います。そういう事業規模の視点からすると、この福岡にある国連機関は、日本で比較的というか、一番大きいと言っていいと思います。そういう組織があるということをご理解いただければ大変うれしいなと思います。ここに図で示しております国々、西はイランから東は日付変更線まで、この 28 カ国で私どもは活動しております。盛んにうちの職員はこういうところに出張しております。また、こういった国から福岡に頻繁に訪ねてこられるのです。

国連ハビタットは別の名前を「シティ・エージェンシー」、都市の国連機関と言われています。どういふことから都市問題が出てくるかということですが、ここに世界の人口の推移を示してあります。2000年時点で世界の総人口は61億でございます。この61億という人口が、2030年、30年の間に83億に増加します。すべての都市問題の原点はこの人口爆発にあると言われているのです。30年間で22億の人口が増える。この22億の衣食住というものをどうしていくかということが、地球社会に非常に大きな課題としてのしかかってくるというのが21世紀という時代であります。特に、22億増える人口がすべて都市に集中するということでありまして、従いまして、都市における住居の問題、食料の問題、水の問題、ゴミ処理の問題、こういったことが21世紀の非常に大きな課題になるというのが私の認識でありますし、私どもがこれから取り組んでいく課題の原点「都市化」という問題でもあります。

申し上げたような都市化によって、住宅、飲料水といったものが不足してまいりますし、都市問題は環境問題につながってまいります。それからまた貧困層の拡大といったことにもつながっていくわけでありまして。ここに示しているのは、発展途上国のこれから人口爆発を起こしていく都市にあるスラムです。



何となく屋根があって、雨だけはしのいでいるけれども水はない。非常に汚れた水を飲んでいる。また、だいたいスラムは水がある川沿いに広がっています。さて、ここにあるのは何でしょうか。



いつも小学校や中学校に行つて質問するんですが、小学生は池だとか、ここで泳ぐのかと言いますが、これがスラムの人たちの飲料水。これを飲んで暮らしているのがスラムの生活であります。英語で「ウォーターボーン・ディゼーズ (water-borne diseases)」と言いますが、水で感染する病気がどんどん増えるわけでありまして。乳児死亡率という

5歳以下の子どもの死亡率が極度に高いというのは、こういう汚い水を飲んでいるのが最大の原因であります。下痢を起こしてそのまま衰弱して死んでいくことが発展途上国のスラム地区では起こっています。また学校もありませんので、スラムの中の廊下で学校が開かれているという状況です。

では、こういうスラムをどうやって改善していくか。人間の基本的ニーズは何か、住宅であり、安全な水であり、ゴミ処理であり、といった基本的なものにハビタットは取り組んでいるわけですが、その場合には必ずパートナーシップ、住民参加に重点を置いているわけであります。日本の都市計画法の中にも住民参加、住民公聴会ということで、住民からきちんと意見を聴きますよという条項が確かに入っているんですが、本音を申し上げれば、そういう住民の意見を吸い上げていくという手続きがなかなかうまくされてないというのが日本の現状かと思えます。ところが発展途上国の場合はお金はないけど時間があるので、いわゆる住民組織を作って、その住民組織が民間企業とか自治体の人やNGOの人と一緒にまちづくりの構想を立てる。なおかつ、まちづくりの実際の設計から、まちづくりの労働者にもなるというのが発展途上国のやり方であります。



これはミャンマーで住宅改善のための集会を開いているところであります。



ネパールでもこうやって、のんびりしたもんですね、木の下で日がな一日うちの村をどうするかということをお話していただける。



アフガニスタンの場合は宗教上の問題がありまして、男女が一緒になって会合が開けません。男性のコミュニティフォーラム、女性のコミュニティフォーラムに分かれて、まちづくりをいろいろ議論しています。実際こういう議論の後に町に出て行って、設計図を広げて、自分たちのまちをどうやって創っていくかということ話し合っ、最終的にはそこに住む人たちが労働力を提供して、この場合にはミャンマーで水道を引いているところでありますが、事業に参画をしていくのです。ここにあるのもその延長上で、ミャンマーで村総出で灌漑整備をやっていきます。アフガニスタンの場合、私ども日本政府から550万ドル、約6億円ちょっとのお金をいただいて住宅を1万戸建てておりますが、よく日本の企業の方が来られるんです。「ハビタットは1万戸、アフガニスタンで住宅建てているそうじゃないですか。うちの方にちょっと仕事回してもらえませんか」というお話があるんですよね。日本の住宅産業界は、1995年の神戸の地震の時に相当数の仮設住宅を造りました。あれ一戸400万円するんですね。



アフガニスタンの場合はこうやって自分たちで労働力を提供する。それからここにある日干しレンガ、これは子どもたちが足でこねて自分たちで作るので材料費はほとんどタダなんです。問題は窓枠とか、屋根の中の柱とか、そういった特殊な部分だけを国連ハビタットが提供しているわけです。その結果が家一軒400ドルで建てているということです。約5万円ちょっとだと思います。従って、こういう住民参加の手続きをすることで非常にコストの低い住宅を作ることができます。また、まちづくりをすると同時に、住民たちが自分たちでまちをつくっていく意識を定着していく。いわゆる援助慣れから自立していく過程になると我々は確信をして、住民参加のまちづくりを進めているわけです。これが住民によってできたミャンマーの井戸であり、カンボジアの井戸です。それ

から、これは先ほどのスラムのようなところが住民参加の手続きによって、インドネシアの住宅街になり、カンボジアの住宅街になっていったということでありまして、私どもはこんな形での住居の改善を進めているわけです。

私どもの最大の今の仕事はアフガニスタンであります。アフガニスタンも昨年、平和構築がなされて、私どもも去年の早い時期から活動をやっておりまして。これは最近の映像ですので 10 分ほどご覧下さい。

(ビデオ放映)

ちなみに今のビデオのナレーションは私ども国連ハビタットの親善大使でありますマリ・クリスティーヌです。タレントで異文化コミュニケーターのマリ・クリスティーヌさん。アフガニスタンには私も去年の 5 月からこのビデオを撮った 2 月までに 3 回行ってますが、最初に行った時は本当に戦争が終わった時期なので食料もなければ電気もない、水もないという状態でした。私もお腹をこわして大変でしたが、その後 10 月に行き、2 月に行き、本当に目に見える形で生活環境が改善されてきたと思っています。ホテルひとつとりまして、最初に行った時はエレベーターも動いてなければ毎日 8 階までかけ登る生活をしていたのに、今年の 2 月には常時ではありませんがたまにエレベーターも動いているという状況まで改善されました。平和をできるだけ維持させて、改善の喜びが続いていくように我々は努力していかなければなりません。イラクという問題が起こるとみんなの目はそちらに移ってしまいますが、国連としてはアフガニスタンも忘れないようにやらないといけないと心しているところです。

さてイラクはイラクで、非常に重要な問題であります。私ども福岡事務所は、アジア太平洋 28 カ国、イランまでですので、イラクについては対象外であったわけです。しかし、私が駐日代表という職を別途与えられまして、駐日代表である以上は日本政府が関わるものにはすべて対応しなきゃいけないということです。イラクについてもアフガニスタンの経験を伝えるという形で関わっていくことになっております。

国連ハビタットの場合は、1997 年、第 1 次湾岸戦争の後から住宅再建プログラムをイラクの国内でやっております。国連がイラクの石油を売って、それを食料に変える、という人道援助をやっていたわけですが、そのお金の一部として住居復興事業というものを、特にイラク北部、クルド地区というのがあるんですが、そこを中心にやってきております。このプロジェクトは私どもハビタットの中でもかなり大きなプロジェクトでありまして、過去 5 年間に 720 億円つぎこんでおります。これは石油の上がりなものです

から、プロジェクト自体は大きなものになっておりますし、イラクだけで 600 名の職員を貼り付けております。右側にあるような結構立派な住居をこのお金で造っています。昨年 12 月の時点で、住宅 2 万 1000 戸、病院約 130、道路で 2800 キロという形で事業を進めているわけですが、やはり今回のイラク攻撃の後、国内避難民それから海外の難民が引き上げてくるわけです。



右下はイラクの仮設住宅です。それからテント生活者も非常に多いものですから、住居の改善をしていかなければいけないということを国連事務総長の方からも指示を受けているところであります。

先月の 3 月 28 日に国際連合全体が今回のイラク攻撃後の復興ということで、今後 6 カ月で 2 億ドル、約 240 億円のアピールを出しています。私どもはその中で特に避難民の問題と、避難民に関わる住居の問題を担当するわけですが、私どものアピールも 2500 万ドル、約 30 億円ということで、国連全体のアピールの中に含まれております。これがイラク、今回の攻撃は中南部が主ですので、中南部にだいたい国内避難民が 75 万世帯くらい出てくると言われております。そういう人たちに対して住居を建設する、また基本的な飲料水などのサービスをやっていくということをこれからやっていきます。それから長期復興計画というのを国連ハビタットとしても対応していきたいということで、駐日代表としてアフガニスタンの担当官とともにイラクにすみやかに行く必要がある為、6 月ぐらいをめどに行つてこようかと考えているところです。

今申し上げたようなことが国連ハビタット全体の活動と、特に最近話題になっておりますアフガニスタンとイラクの問題を取り上げたわけですが、それではこういう国連ハビタット福岡事務所と地元とはどうなっているのか、ということを少しお話ししたいと思います。

地元・ホスト国に貢献しているのか？

私の前の所長代行、その前の初代の所長、この 2 人はメキシコとスリランカということもあり、なかなか地元との関係を十分に構築できなかったという反省がございました。私が昨年 4 月に就任した時に知事からも「とにかく福岡にハビタットがあることを知

らせてほしい。メッセージを出してほしい」ということを非常に強く言われまして、私どももこの1年間そういったことをやってきたつもりであります。特に福岡の国際化促進については、いろいろな会議もやらせていただきましたし、国際化の計画についても参画をさせていただきました。それから福岡の知名度の向上。私どもはアジア太平洋に16の事業事務所を持っていますが、そういう所と毎日、福岡事務所はメール、FAXで交信しています。そういう国には福岡という言葉がかなり浸透しています。特に私どもの一番大きいプロジェクト、アフガニスタンの場合は、日本という福岡という形で名前が知れています。そういった意味では福岡の知名度の向上にも役立っているのではないかと考えています。それから福岡の都市問題解決の方策を技術移転するということですね。これは特に福岡市がゴミ処理技術を持っておられまして、好気性ゴミ処理技術ということで福岡方式と呼ばれていますが、この福岡方式を中国、イラン、マレーシアといった国に技術移転していくことをやらしてもらっています。それから学術とか専門分野につきましても、今申し上げました福岡方式のゴミ処理方式については福岡大学と一緒にやらしてもらってますし、九州大学の先生方等は居住問題ということで検討・研究をしていただいています。国際教育への貢献ということなんですが、資料の中に「福岡県における主な国連ハビタットの広報活動」という紙があります。去年の私の就任からこの1年間に何をやって来たかということを書いております。もちろんイベント、国際会議ということもありますが、ソロプチミストという女性の組織とも一緒に活動させて頂いています。それからロータリークラブとかライオンズクラブとも協力関係にありますし、キャナルシティでチャリティオークションもやりました。また展示等させていただきます。特に去年の12月から福岡県がハビタット福岡の知名度を上げるためのキャンペーンを実施されまして、私はその中で出前授業というのを担当しています。今年の2月から小学校に行って、小学生に国際理解の授業をやっています。今日までに1300名ぐらいの子どもたちと対話をさせていただきました。国連ハビタットの宣伝も大事ですが、福岡の未来を背負う子どもたちに国際協力のお話をさせていただくことも重要だと思っています。

ハビタット福岡の支援組織は？

そういったハビタット福岡なんですが、日本の中にはたくさんの支援組織を抱えています。日本政府の方は国連ハビタットの主務官庁としては国土交通省でありまして、国土交通省からは私ども福岡事務所の事業経費も一部出していただいております。それから外務省からは、定常的に毎年お金をいただいておりますが、私がまいりまして初めてアフガニスタンの住宅対策ということで緊急無償資金550万ドルいただきました。約6億円ちょっとですか、引き続きいただきたいなと思っています。それから地元は福岡県、福岡市、地元経済界からですね、99万ドルいただいております、これが私どもの運営

経費の基礎になっているということです。それから市民の方は「ハビタット福岡市民の会」というのがありまして、我々のハビタットの活動をいろいろ勉強されています。それから国会議員は、国連ハビタット議員連盟というのがありまして、会長が山崎拓先生であります。副会長が木庭健太郎先生ということで、だいたい28名ぐらいの先生がおられます。遅くとも6月には東京・丸の内ビルで国連ハビタットの募金キャンペーンを国会議員の先生方が集まってやられるということで、大変ありがたいことだと思っております。それから先ほど申し上げた親善大使のマリ・クリスティーヌさんも、東京をベースに国連ハビタットの支援をいろいろな形でやっていただいております。また、国連の場合にはだいたい協会をもっていて、この協会の方で募金活動などをやっているわけですが、遅ればせながら日本ハビタット協会も2001年3月に設立いたしまして、昨年11月にいわゆる非営利特定活動法人、NPO法人になり、いろいろな形で民間の資金を集めていただいております。今年はこの日本ハビタット協会から、200万ほどの経費を運営経費としていただくことになっておりまして、こういう民間の、一般の方々の資金を少しでも集めることによって、地元・福岡の、福岡県、福岡市、地元経済界の負担の軽減に務めていきたいというのが私どもの考えです。

以上が国連ハビタットの概要でございます。まだまだ知名度は十分に浸透していないかもしれませんが、昨年来いろいろな活動を通じて福岡の方々に少しでも近い存在になっていきたいと、私も日々広報等を行っているわけです。当クラブの皆様にも活動の趣旨をご理解いただいて、引き続きご支援いただければ大変ありがたいと思っております。

まだ少し時間がありますので、実はこれからが今日の話の本題になります。なぜハビタットが福岡にあるのかということからお話をしたいと思います。私が国土庁の地方振興局に勤務しておりましたときに、当時の国連ハビタット事務局長から「アジア太平洋事務所を日本に置かないか」というお誘いがありました。私は国連ハビタットの本部に務めていたこともありまして、ぜひとも日本に誘致したいなと考えたわけであります。それで日本国中に話を流しましたら、なんと62自治体がぜひともハビタットを呼びたいと。ハビタットでなければ他の国連機関でもいいと。「門前列をなす」というのは本当にあのことでありまして、毎日職場に行くと自治体の方が私の机の前に並んでおられるという状態が続いたんです。いろいろご説明して「やはり地元負担がないと誘致はできないんですよ」と申し上げたところ、最終的に残ったのが東京と横浜と神戸と福岡。それで当時、1995年に阪神大震災がありまして、日本政府、特に国土庁は防災局を抱えていて、神戸の復興を何でも最優先でやっていたものですから、国土庁の幹部は国連ハビタットは神戸に持っていかうとかなり強く主張したわけです。私は国際協力もやりますけれど、基本的には国土計画が本職でありますので、21世紀の国土計画を考えた

場合に、果たしてアジア太平洋事務所なるものを神戸に持って行っていいのかと質問を投げかけて、やはりアジア太平洋の拠点となる福岡に国連機関を持っていくのが最も理にかなった誘致ではないかと主張したわけです。当時、麻生さんが初めて知事になられた第1期だったわけですが、最初のプロジェクトとして国連機関を福岡に誘致すると決められた。全体の合意のもとで動かすのはなかなか大変だったと思うのですが、麻生知事の強力なイニシアチブで、福岡サイドも誘致という方向で固まりました。やはり決定的な要因というのは福岡空港ですね。東京に置きたいとか、神戸に置きたいという話でしたが、足回りのことを考えると東京は全然ダメなんですよね。皆さん、東京と言うと足回りが良さそうで、日本の国連機関はほとんど東京にあるわけですが、日本の国連機関のほとんどは駐日代表で日本の政府と仕事をするから東京にあるのが都合がいいわけですね。彼らはあまり海外出張しない。東京から海外出張しようと思うと、成田へのアクセスがあるのでフライトの4~5時間前に東京都心を出ないと飛行機に間に合わない。ところが私どもは今アクロス福岡に入っていますが、福岡から海外出張する場合はフライトの1時間15分ぐらい前にオフィスを出るんですよね。そこだけで3時間から3時間半ぐらい東京と差がつくわけですから、これは絶対に足回りは福岡だと私は思っています。そういう私どもの説得もありまして、1996年に国連の決議が通りまして、福岡に国連機関を置いていただくということになったわけでございます。私のその時の願いとしては、福岡が育てるハビタットということで、地元と融合しながらこの国連機関が存在する。また地元の国際化に貢献していくことは、この国連ハビタットにとってもありがたいことではないかと思っています。

さて、ここから私が今日お話をしたいポイントなわけですが、では本当に福岡をどういう風に考えたらいいのかということですね。

脱亜入欧かアジア主義か

今日の演題であります「アジアとともに生きる福岡」、「アジアに開かれた福岡」といういろいろなところで声を聞きますが、本当に皆さんアジアのことをそこまで思っておられるのですか、という基本的な疑問もあります。ここに書いてありますのでは「脱亜入欧」「アジア主義」の2つです。1つ目に皆様よくご存知の福沢諭吉と岡倉天心。福沢諭吉は九州の人ですから説明するまでもないと思いますが、明治維新の志士であり、大分中津藩の武士だったわけですが、1860年に咸臨丸に乗って米国に渡り、そのあと欧州を回って明治の思想家として生きた人です。慶応義塾大学の創始者でもあります。その福沢諭吉の言った言葉に、その後の、日本を非常に左右する表現がこの「脱亜入欧」であります。彼が50歳の時に時事新報という雑誌に脱亜論という論文を書いているんですが、その書き出しが「ヨーロッパは文明。アジアは未開野蛮。我らアジア東方の悪

友を謝絶する」と書いてあるんですね。我々はアジアじゃないよ、先進国なんだということ福沢諭吉は時事新報の中で言っているんです。要するにヨーロッパとアメリカとつきあうことは、福沢諭吉の脱亜入欧論から始まっていると私は思っているんですね。本当に脱亜入欧って日本人好きですね。我々はアジアの顔をしているけど欧米と同じなんだという感覚が非常に好きであります。今から10年ぐらい前に梅棹忠夫さんという方、国立民俗博物館の館長だと思いますが、彼が書いた「文明の生態史観」という本があります。これは爆発的に売れた本で、いろんなことが書いてあって、生態学の話がいっぱい書いてありますが、結論は何かと言いますと、日本の位置するところは北緯であって、ヨーロッパとアメリカと同じポジションにあるから日本というのはヨーロッパ、アメリカと同じだという結論なんです。ずっと読んでいくと「文明の生態史観」も脱亜入欧論だと思いました。だからあれだけ売れたし、日本人の心をくすぐったと思っているわけです。その一方で岡倉天心、これは福沢諭吉と同じ時代に活躍した人ですが、文部省の官僚であります。彼は横浜生まれで、今の東京芸術大学の創始者ですが、後にボストン美術館に移りまして、そこで東洋部長という要職を務めたまねな国際人であり、まねな日本人であります。彼の名著は「東洋の理想」という本であります。この「東洋の理想」の書き出しが「アジア・イズ・ワン」というものです。アジアはひとつだという書き出しで始まる本なのですが、岡倉天心の場合は、日本というのはアジアとともに生きていくということを非常に主張した人でありました。それが日本の中のアジア論につながっていくわけです。残念ながらこれが戦時中は大東亜共栄圏構想のようなものにつながっていったところもありますが、アジアグループを創りだしたひとつの創始者と私は思っています。

日本の外交であれ、国際化論であれ、常にこの「脱亜入欧論」と「アジア主義」が交錯しながらずっときているのが今日の日本なのではないかと思っています。例えば、国連はどうかというと、国連というのは国連総会もそうですし、国連ハビタットの総会なんかでも、だいたい10時ぐらいに始まるんですが、その前に地域会合というのをやるんです。アジアグループに分かれたり、EUグループに分かれたり、アメリカグループに分かれたり、アフリカグループに分かれたり、地域会合やってるんですね。地域ごとに意見を取りまとめているんです。日本はどのグループに入っているでしょうか。これが、日本は二足のわらじなんです。毎朝、地域会合には欧米グループとアジアグループと両方出ているんですよ。やはり人間、二足のわらじというのはいかんと思うんですけど、今まで日本の外交政策の中にも脱亜入欧論とアジア主義というのがあって、どうしてもそこが割り切れないという状態だと思うんですね。それでは日本の未来を考えた時に本当にどうするんですか、といつも疑問を福岡の方に投げかけているんです。ところで、日本の未来は明るいとお思いでしょうか。日本の未来は経済的に言うのだいたい決まってきたいるんですね。1997年に日本の労働力人口はピークを打ったんです。もう今、

日本の労働力人口は減少しています。日本の総人口は2007年に1億2800万弱でピークになります。2050年に日本の人口は9000万に落ちるんですよ。その差が約3800万です。そうすると今と同じだけの一人当たりの生産性を維持したとしても、日本の経済は4分の3になるということです。確実に経済大国第2位から落ちます。そして日本の経済成長率は、どんなに見越したところで2%を超えることはないと思うんです。石油でも出れば別ですが、現状でいくとそういう感じになっていく。それでは、その中で東アジアはどういう状態かという、中国の今の経済成長率というのはだいたい10~11%、高い時は14%ぐらいになっていると思います。東アジア全体で見てもだいたい10%を超えるような状況なんです。これは私が言っているのではなく、去年の国の通商白書にはっきり書いてあります。その通商白書によると一人当たり国民生産は1999年にシンガポールと香港が日本に追いついたということです。2007年には台湾が追いつく。2011年には韓国が追いつきます。SARSが広がって中国経済に影響あるかもしれませんが、現在のトレンドが続けば、2040年に中国の一人当たり国民総生産が日本に追いつきます。向こうは人口12億いるわけですから、とても日本は追いつけないということが明白になっているんですね。日本人は誰も認めたくないんですよ。去年、通商白書が出た時、新聞でさえこの部分をまともに書かなかったですね。だから日本人としては認めたくないと思います。例えば上海なんて都市が本当に隆盛を極め始めているということで、我々ソフトの分野でも一部やられているとされているところがあるんですが、この間NHKで上海の隆盛というのをドキュメントでやってたんですよ。晩飯食べてたんですが、隣のビジネスマンのおじさん、僕よりちょっと上の方がいらして、そのテレビを見ながら「上海っていうのは伸びてるんだけどソフトは全然ダメなんだよ」と隣でしゃべってるんですよ。心情的にはよく分かるんですが、やはり日本の将来を考えていくような国土計画屋であるとかプランナーである以上は、もっと真摯に中国の脅威というのを見ていかなきゃいけないとつくづく思っています。

もうひとつ申し上げたいことは、皆さんEUというグループありますね。EUのああした経済圏とともにアジア太平洋の巨大な経済圏もできますよという話をしゃべる人がいますけれども、これは地政学的に地理学的にはかなり違うんですね。EUというのは半径がだいたい1500キロの中に、あの20数カ国という先進国が含まれているんです。半径1500キロというとだいたい東京と福岡の距離ですよ。それをグルッと円で描いた中にあの西ヨーロッパというエリアがあるわけですよ。そういうことを考えると、東京を中心にグルッと1500キロでエリアを描いてもあまり他の国はないんです。ところが上海あたりを中心にして1500キロ半径で囲むとですね、これはまさに東シナ海の、黄海経済圏というぐらいの広がりが出てくるんです。日本はどこがかすめるかという、九州がかするんですよ。だから私は21世紀はそれぐらいの広がりの中で経済のリングというのを考えていかないとダメだと思うし、その時には確実に九州というエリアがこの

経済圏の中に含まれてきて、この時には東京よりも福岡の方が有利なんだということを私はいつも言っています。少なくともこういうアジア太平洋を含めた巨大な経済圏ができるということは、日本の中の経済重心、中心ではないですよ、経済重心は必ず西に動くというように私は10何年言ってるんです。首都機能移転の時も移転の候補地に福岡をあげていたんですが、役所の中には首都北上論というのがありまして、首都は常に北に行くんだという人がいまして、いまだにもめています。首都が来る来ないは別にして、経済が西にシフトすることは確実なことでありますし、その時にこの福岡という町、博多という町、九州北部が非常に重要な位置を占めるのだと。結論から言うと、もう福岡はアジアと生きるしかないんですよ、と常に言って歩いているわけです。ところが福岡の中にも脱亜入欧論が根づいてまして、だいたい国際会議を開くと基調講演はアメリカから呼んで来るんですよ。ヨーロッパの人とか。なんで韓国とかマレーシアとか、そういう所から呼ばないんですよと言っているんですが、徐々にその辺は変わってくると思います。特にここ1週間ぐらい前に規制緩和特区が認められたと思います。北九州の国際物流拠点という話であり、福岡のアジアビジネス拠点という方向、そういう方向性はアジアのこれからの戦略を目指して北九州市、福岡市で考えてこられたんだと思うんですね。私は非常にウエルカムだと思っているんです。それから例えばベトナムとの直行便が今月か来月か就航するはずですね。そういう方向に向き始めていますので、私は福岡の人にいつも言ってますよ。東京に5回出張する暇があったら上海に3回行った方がいいよって。いろんな人が中国経済、フィリピンの情勢、マレーシアの情勢、そういうものを見てこれからの福岡の、北九州の発展と役割を考えてほしいなと思っています。

最後に福岡ルネッサンスと書いてありますが、この福岡ルネッサンス、北九州も北九州市ルネッサンスとかやってるらしいですけど、私が言っている福岡ルネッサンスというのは2000年前の博多という町がどんな町だったのか、みんなもっと考えてほしいと言ってるんです。魏志倭人伝、275年に中国の魏の使節が邪馬台国に来るわけですけどけれども、時の博多というのは戸数が2万戸、人口でいうとだいたい10万ですか。これは日本最大の国際都市ですね。大きさからいっても日本で3番目ぐらいの都市だったと言われてますが、そういう3番目の都市であり、なおかつ中国との交流が最も盛んであり、大陸文化はすべて博多を通して日本の中に広がって行ったというのが2000年前の魏志倭人伝の時代の博多と理解しています。その後、そういう大陸との窓口を鎌倉時代までずっとやってきているわけです。そういう博多の国際性、外に開かれた社会、大陸の文化を吸収していく力というのは今から2000年前の人たちは持っていたわけです。唐人町ですか、そういう町もあります。先日歴史学者さんと話していたら、2000年前はかなりの人が中国語をしゃべれたはずだと言うんですね。それぐらい大陸に対して目を向けていたのが2000年前の博多、福岡です。そういう気持ちを思い起こして、今後の経

済運営なり、戦略なりを考えてほしいと思います。今、日本全体が非常に保守的になっていますよね。チャレンジ精神がない。この100年ぐらいの間、特に戦後ですが、既得権というのができちゃってシステムというのが完全にできちゃった。そういうものを変えていくのがとても難しいわけで、今回の規制緩和なんてよくできていると思いますが、まだまだ緩和すべきところはいっぱいあります。例えば中国の沿岸域で特区をつくった時のやり方を考えると、開港時間を延長するという程度のことでは追いつかないような気がしますし、例えば海外からの直接投資に対して日本はまだかなり消極的ですよね。今だいたいアメリカとかイギリスですとGDP、国内総生産に対する海外からの直接投資の比率はどのくらいかという、25~30%ぐらいあるんです。日本の比率は1%以下ですから、門戸を閉ざして海外の投資が行われぬように規制をやっているわけで、その辺は打ち破っていかないと本当の規制緩和特区はできないと思っています。その辺のことも考えながら今後の運営をしていってほしいと思います。また、特に博多、福岡って九州の中の一人勝ち構造ですよね。ほっといても勝つ町なんです、ここは。他の県庁所在都市の人口が福岡に集まってきているということですから、やはり九州全体の中心としてのかじ取り、九州の中の小さな県の調整ということだけでなく、九州の雄としての福岡県というのがどうにかじ取りをして今後国際的な荒波を乗り切っていくかということが、とても重要な視点だと思っています。そういう面からすると常にチャレンジしてもらいたいと思いますし、私も日々チャレンジしているつもりなんです。自分たちの既得権を守るというよりも、新しいビジネスにどうやって飛び込んでいくかということに目を向けて日々やっていっていただきたい、というのが私のお願いであります。

国際社会に生きる

最近、私は小学生と話をするようにしてしまっていて、小学生も2050年になれば55、56から60歳ということで、福岡の中樞になっていくわけですから、子どもたちに国際社会に生きるというテーマでしゃべって歩いています。これは私の経験なんですけど、私も海外にちょっといたことはありましたが、いきなり国際連合というところに放り込まれて、27歳の時でしたか、いきなり上司がイタリア人で、本当に自分の英語はつたないなと思いました。やはり今の子どもたちの言葉の壁というものが取り除けるように我々としては努力していかねばならないと思います。もちろん最初に国連に務めた時もそうでしたが、2回目にスイスのジュネーブの国連欧州本部というところで、僕の前に座っていたルクセンブルグの女性なんて5カ国語しゃべれるんですね。お母さんがフランス人でお父さんはドイツ人、英語は国連の言葉だから当然、仕事がイタリアだからイタリア語をしゃべる、イタリア語しゃべれるとスペイン語もしゃべれる。こういう構造で5カ国語しゃべれる。それがめずらしいことかという、全然めずらしくないんです。少なくとも国連の欧州本部で5カ国語しゃべるなんてのはザラにいます。それがやっぱり世界の語

学レベルだと思うんです。もちろんイタリア人がイタリア語しゃべって、スペイン人がスペイン語しゃべって、お互い5割理解できるんですから、果たして2カ国語とカウントするかどうかは別な話ですけど。それこそ鹿児島の方が鹿児島弁しゃべって、東北の方が東北弁しゃべったのと同じ状況かもしれません。ただそれぐらいのレベルがヨーロッパ人の語学のレベルなので、やはり日本の子どもたちも少なくとも英語はやれと言って歩いています。

2つ目に日本の立場に対する認識不足ということがあると思います。私も子どもの頃から日本の平和教育を受けてきて、経済大国第2位の国から国連に派遣されたと思って行ったわけですけど、正直言って日本ってあまり尊敬されていない。例えば今回国連安保理の中でイラクの話をやってる。日本って中に入れないんです。外で待ってるんです。安保理の会議が終わったら日本の大使館の代表部が走って行って今日はどうでしたかと尋ねる。だからどうしても国連の安保理の常任理事国になりたいという強い希望はあるんです。私が1992年に国連の欧州本部から戻って来たときに、官房総務課というところに勤務することになりました。隣にいた同僚の補佐が「いやあ野田さん、日本もとうとう国連の安保理の常任理事国になりますね」と言うもんですから、私が「あと10年かかるんじゃないですか」と言いましたが、10年過ぎて何もおこりませんね。私はこれから10年かかっても難しいかもしれないと思っているんです。それがやっぱり日本の立場だということ、どれぐらいの実力なのかということ素直に認めなきゃいけないと思うんです。新聞だと日本は常に大国。大好きですね、日本は生活大国、文化大国、何でも大国ですね。日本人の心をくすぐるのはとてもよく分かるんですが、やはり21世紀の経済構造ということを考えると、もう少し抜け目なく自分たちのポジションを考えて戦略を練らないと、戦艦大和の底に大穴が空いていたということもあり得るんですから、その辺十分に考えてほしいと思っています。

それから日本の立場と同様に、なめたらあかんヨーロッパという話を子どもたちにしていきます。だいたい日本から見ていると、例えばイギリスなんか斜陽国じゃないかと言われるかもしれませんが、イギリスは旧大英帝国ですね。ポルトガルにしたってそうですよ。一度は世界を制したことがある。覇権国ですね。いまだにその遺産はラテンアメリカにいっぱい残ってるわけです。ブラジルもそうです。そういう覇権国となったポルトガル、スペイン、イギリス、こんな国の外交の強さはものすごいものがあります。イギリスなんてのは大英帝国オリンピックをやっているのをご存知ですか。いまだに大英帝国50数カ国が集まってエリザベス女王にひざまずいて、彼らだけのオリンピックをやっているんですよ。そういう連中が国連で投票をやったときに、イギリスが右だと言えば当然右に向きますよね。ということはイギリスというのは一票ではなくて、イギリスが一票投じると50数カ国投じる可能性があるということです。これはものすごく強力なものですよ。アメリカより強いと思いますね。フランスだって今回、フランスの行動が良い

か悪いかは別問題にして、ガタガタだと言われているフランスだって国連安保理の中であそこまで米国に対抗できるというのは、やはりそれなりの実力ですよ。そういうものをきちんと子どもたちに理解してもらいたい。理解した上で、ヨーロッパと米国とアジアと、今後つきあっていく必要があるということだと思います。

4番目の安全保障理事国の話は今お話ししたので飛ばしますけれども、最後にいつも子どもたちに話をするのは、フランス語をしゃべれない娘というのがあるんですよ。これは、なんで日本はなかなか国際化しないかという話につながるんです。私がジュネーブに派遣されたのは1989年ですが、その時、私の娘チサトは3歳で、まだ日本語もまともにしゃべれなかったんですが、いきなりスイスのジュネーブに連れて行って、着いて3日後に地元の保育園にボンと放り込んだんですね。フランス語の「フ」の字も分からないのにフランスの学校で暮らしていくことになる。なかなか元気なやつで、弱音もはかないで暮らしてたんですが、半年ぐらいいして食事をしながら日本語で話したら「パパ、おうちの中で日本語使うのやめてくれる」と言うんです。何でだと言うと「チーちゃん、フランス語忘れるから」と言うんですよ。6カ月たつと隣の女の子をどつきながらケンカするほどフランス語がうまくなってましたけど、やっぱり本人はフランス語やジュネーブの生活になじむのに相当に苦しい思いをして国際性を身につけたわけですね。3年半して帰ってくる時、ドアの向こうでしゃべってる彼女のフランス語は本当にネイティブのフランス語でした。ところがその子を日本に連れて帰って来て何が起こったか。いわゆる帰国子女問題ですね。まず行動パターンから全然違いますから、先生から何か言われても平気でイエーイとか手を上げて授業を受ける子どもと、日本のシャイな子どもたちとはアツと言う間にギャップができて、なおかつポロッとフランス語が出ちゃったりすると、みんながコイツは宇宙人だといじめるわけですね。そうなるとうちの娘も学校に行くのが嫌になったりして、何とか友達をつくりたいと自分自身の国際性をどんどん捨てていくという行動に出ちゃう。あるとき「パパ、もう私フランス語勉強するのをやめるから」と言い始めて、どんどん日本に同化してしまいました。今や明けても暮れても剣道やっていますが、本人は日本ってとってもハッピーな国だと言って暮らしてます。それを見て、自分自身が国連職員として残念だと思うところもありますが、日本というのは同質性を重要視しているだけに、そういう異質物を受け入れない国なんですね。でも、それをやっているといつまでたっても日本は国際化しにくいということでもありますから、やはりこれからアジアに向けて漕ぎ出していく博多、こういう町では胸襟を開いて海外の異質物を、例えばそれが非常に奇妙なものであってもきちんと受け入れる。SARSは別ですよ。そういう気持ちを子どもたちにも持ってほしい。だいたいこんな5つの話をしながら小学校、中学校、高校を回っているんです。

福岡に国際人を育てる

最後に福岡に国際人を育てるということで、いつも子どもたちに世界史をちゃんと勉強してくれということを書いてます。やはり世界史を勉強しないと色々な国際関係、なんでイラクでああした闘いが起こっているかということも十分に理解できないと思いますので。イラクの歴史をひも解いていきますと、今の中東問題なんてほとんどイギリス、フランスが起こしているようなものなんですよね。いわゆる植民地政策の中でハチャメチャな政策をとってきた。それが今や自分たちのやってきたことはサッと忘れて、色々なことを言ってるわけですけど。それから2つ目には今申し上げた異文化理解、自分たちと異質なものが世界の中にはいっぱいあるということを子どもたちには勉強してもらいたい。距離ひとつとっても違いますよね。日本人が普段話すときの距離、欧米人が話す距離は近いです。欧米人と話すとグッと近寄ってきますから、こっちはパッと引きますでしょう。壁にぶつかったという話も聞きますけど、文化の距離というものもあるんだということを子どもたちに理解してほしいなと思います。3番目は奇人変人のすすめです。日本人てみんな同じことをやるから、さっきみたいな異質物の話がどうしても出てきますが、海外とつきあうとみんな異質物なんです。その異質物を受け入れられるようになっていくことが重要で、そうすると自分自身も少し奇人変人じゃないとうまくつきあっていけないということもあって、奇人変人になることを恐れるな。ベストになるよりオンリーワンでいて下さいと言っています。あと4番目はチャレンジャーですよ。本当に日本の中で最近チャレンジ精神が落ちてきたと思います。みんな沈めば恐くないというやつですね。みんな既得権にしがみついています。私の時代は大丈夫とっていても、日本全体が落ちていくわけですから20年後にはどうなっているか分からない。そこのところを一步踏み越して、アジアの成長のリングに入っていくかどうか、これはもう強烈なチャレンジだと思っています。特に九州の人たちにはそういう気持ちをもって商売してもらいたいと思います。そういうことをやっているときくと福岡は開かれた社会になっていって、日本の中でも最先端の21世紀をリードする県になるのではないかと私は思っているわけです。私は多分東京にまた帰って本省に戻ることになると思いますが、私が役人をやっている限りは国土計画屋として生きていくつもりでありますし、国土計画の中で福岡というエリア、九州というエリアをどういう形で21世紀の中で位置づけていくかを考え続けていきたいと思っています。

当クラブの皆様は福岡の経済界の中心の方々でありますから、私が今申し上げたようなことを少し頭の隅に置いていただいて、今後の福岡経済の運営に当たっていただくことを願ってやみません。時間がまいったようですので、私の話はこれで終わりにさせていただきます。ご静聴、大変ありがとうございました。